

口蓋裂患者の矯正歯科治療に伴う残孔の消長について

昭和大学歯学部 福原 達郎

口蓋形成術後残孔は、軟硬口蓋移行部と硬口蓋前部に多いとされるが、これに対する手術法の改善は種々工夫発表されている。しかし、なお矯正歯科の外来に訪れる口蓋裂患者には、この肉眼的に瘻孔を呈する者は少なくない。

口蓋裂患者の上顎歯列は、ほぼおしなべて狭窄したものが多く関係上、これら患者の矯正治療に当って、上顎歯列の拡大が実施される。この場合、既存の残孔は当然それに伴って開大してゆくが、その開大の様相は種々である。今回著者らは、狭窄した歯列の拡大治療によるこれら残孔の消長についてモアレ写真による解析を行なった。

症例数は片側性唇顎口蓋裂13例で、うち男子5例、女子8例であった。年齢は、4歳7カ月より10歳10カ月、平均8歳7カ月である。

残孔の治療前の平均面積は 23.51mm^2 で、点状のものから円型、クレバス形までさまざまであり、最大残孔は 67.86mm^2 であり、同一口蓋に2カ所穿孔している例もあった。

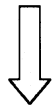
拡大方法は、主として Porter タイプの expansion appliance を用いたが、拡大方式はいわゆる rapid と slow の中間に属するものと考えられる。

拡大に用いた期間は、平均4.14カ月で、2カ月から6カ月にわたっている。

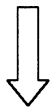
これらの残孔の歯列拡大後の平均面積は、 46.70mm^2 で、最大は 115.91mm^2 であった。

なお、口蓋裂部が完全に閉鎖されていたものが拡大によって新たに穿孔をみせた例は1例も経験していないし、当然この13例中にも含まれていない。

例	犬齒齒列				性			
	擴大前	擴大後	擴大量	擴大率				
			擴大量 _{mm}	費用 _{期間}	年齡			
1	63.23	115.91	52.68	1.83	5.8	2	9Y 7M	F
2	32.79	100.28	67.49	3.06	5.0	2	7Y 2M	F
3	78.05	88.48	9.98	1.13	5.7	4	8Y 1M	F
4	67.86	80.79	12.90	1.19	4.8	3	9Y 10M	F
5	17.76	51.47	33.71	2.90	15.8	6	10Y 2M	F
6	11.35	48.69	37.34	4.92	14.6	5	10Y 2M	F
7	22.39	23.82	1.43	1.06	2.9	4	9Y 10M	M
8	7.46	22.73	15.27	3.05	10.0	3	7Y 1M	M
9	5.87	21.32	15.45	3.63	11.6	4	8Y 3M	M
10	4.40	18.75	14.35	4.26	10.6	6	5Y 10M	M
10	7.09	14.19	7.10	2.00	10.6	6	5Y 10M	M
11	5.80	16.41	10.61	2.83	5.3	4	4Y 7M	F
12	2.17	10.53	8.36	4.85	2.9	4	9Y 10M	M
13	2.96	7.46	4.50	2.58	11.5	5	9Y 5M	M



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



蓋形成術後残孔は、軟硬口蓋移行部と硬口蓋前部に多いとされるが、これに対する手術法の改善は種々工夫発表されている。しかし、なお矯正歯科の外来に訪れる口蓋裂患者には、この肉眼的に瘻孔を呈する者は少なくない。